

“フル・ドライブ”

ドライブ・スルー

尾崎千力



ちょっとそこまで

「うわ、見た？」

「何が。」

「ショッキングな光景だわー。何かいかにもソフトボール部って感じの女子が、日傘さしてたの。しかも深窓の令嬢ばりにヒラヒラレースがちりばめられたやつ。ああいうの、正直萎えるなあ。」

「ちょっと、言い過ぎにもほどがあるぞ。」

弟は、いつもこんなことばかり言って俺を困らせてばかりいる。すれ違い様に落とされる爆弾の数々に、どれだけ肝を冷やされてきたことか。

「兄ちゃん、前見てる？」

「見てるよ、うるさいなあ。」

免許をとりたての僕は、いつもこいつのアシにされる。何も言えない僕にとって、このポジションは不動のものになるだろう。そして今、助手席で車窓からの人間観察に夢中になっているのは、人の車を無料タクシーとしか思っていない、「ちょっとそこまで」が決め台詞の僕の弟・アツシである。

単純オシャレ人間。男女共に友だちの多い、しかも先輩にも後輩にも好かれる人間。流行の服がそれなりに似合っていて、しかもそれに自分色を加えているとかでこなれた感じがすっかり出ている。ジャージを不思議なくらいオシャレに着こなすタイプのあれだ。ありとあらゆる物事を全てオシャレに変えてしまう、カラッとした僕の弟。勉強は少しできないけれど、その分スポーツや最近始めたギターで十分オシャレランク上位にくい込む勢いだらう。

地味メガネ。僕を見たらたいていのがそういうカテゴリーに分類するだろう。確かにそうだ。僕はフツーよりちょっと地味でメガネだ。一つ救いを挙げるとしたら、そのメガネがオシャレメガネだということ。いや、これも怪しい。僕のような地味な人間がつけていると、シャレるために生まれてきたメガネもたちまち...と、ネガティブな発想もおまけについてくる。はっきり言って、僕ほど面倒くさい人間はいないだろう。勉強は、弟よりはできる。そこも救いの一つか。でも僕が腕を通すジャージは作業着にしか見えないし、スポーツも音楽も面白いくらいセンスがない。僕の体力テストを全て録画してDVDにしたら、下手なお笑い芸人より笑えるだろう。正直、何でこんな運動オンチが公共で車を運転する許可を得たのかわからない。

あいつが太陽なら、僕は月だなといつも思う。そして月もなくその後に、月にごめんなさいとも思う。それが僕と弟だ。

「この前さー、本屋で立ち読みしてたらさー、コツコツっていかにも美人な靴音がして、オレの隣りで立ち読み始めたの。意識しちゃってよー。だっていい匂いもするしー。でもさ、帰る時に顔見てガッカリ！ありゃーないわ。栓抜きみたいな顔してたもん。ぼあーって顔。わかるかなー、この感じ。なあ、聞ってる？兄ちゃん、なあ、聞ってる？」

いつも以上に高いテンション。動くたびに香る香水は、僕が女子高生だったら一度はだまされてみたいという気にさせるほどいい匂いだった。弟にドキッとしてどうする！乙女か、僕は！しっかりしろ！ハンドルを一段と強く握り、平静を装って口を開く。

「お前、マジでうるさい。気が散る。しかもそれ、かなりのヒンシュクモンだぞ。外で絶対にするなよ、そんな話。」

「ハイハイ、紳士は言うことが違うってやつですよ。すんませーん。」

わかっている。きっとこいつには兄として見られてない。こんな風に人として大切なことを説明しようものなら、いつも僕の生真面目さやカタさのせいにして冗談半分に切り返される。

「おい、送り迎えしてもらってソレはないんじゃないの？」

「あーあーあー！マジごめんごめんごめん！今のなし！今のなし。な？」

そしてもう車を出してやらないと言うと、ダムが決壊したように「マジごめん」を浴びせかけ、僕を黙らせる。謝罪の言葉を聞きたいんじゃない。もっと兄として教えられることはちゃんと教えてあげたいんだ。こうしてまだ一緒に過ごせる時間に、教えてあげたいことがたくさんあるというのに。「あげたい」だなんて、僕もいつからこんなにお偉くなっちゃったんだよ。思わず苦笑い。しばらくすると、アツシは思い出したかのように口を開いた。

「あ、腹減らない？ドライブスルー行こう。」

「は？お前、こっちは初心者だぞ！」

「いずれは通る道じゃないっすかー、隊長。将来彼女と行くことになった時に恥かいたらどうすんの？行こうよ、な？」

おごるし。な？」

こんなことを言われてしまうとこちらが折れるしかないだろう。おごるなんて、ましてや将来の彼女だなんて言われたら！ちょうどCMで見て食べたかった新メニューがあったんだ。そうだ、そう思うことにしよう。手ごろな店が道沿いにあるのを思い出してほっとした。左にウィンカーを出し、ハンドルを切る。

あれだけマイクに声が入らないなんて、僕は相当センスがないらしい。何度も何度も同じ商品の名前を繰り返すなんて...こんな趣味の悪いプレイはない。ここだけの話、もう一回言わされてたら心が折れていた。恥ずかしさを隠すためのムスっとした顔でお金を払い、紙袋を受け取る。店員の女の子にがクスッと笑われたように見えて、さらに恥ずかしかつた。

「兄ちゃん、マジウケる！『ポテトのM1つ。は？だからポテト、ポテト、ポテトお～！』どんだけポテト好きなんだよ。」

左側のヒトのモノマネがウザい。僕のモノマネは小学生の時にマスターしているアツシだから、似すぎていて逆に笑えない。悪夢再びといった車内で、僕は何度も意識を失いそうになった。何とか気持ちを奮い立たせて、我が弟を一喝する。

「まったく、お前は本当に幸せな人間だな。ホラ、バーガー開けてよこせ。助手席の仕事、サボンな。」

何をしても不器用で不機嫌な僕にハンバーガーを渡すと、今度は慣れた手つきでドリンクホルダーにシェイクとポテトをセットし、自分の足元には食べ物を全部出した後の紙袋でゴミ箱をこしらえている。そうだ。こいつはこうやっていつも変に気のつくところがある。まるで合コンでサラダとかをみんなの皿によそうのが得意な女子大生みたいだ。あまりにも静かに作業していたので、とうとう怒ったか？なんて思っていたら、

「...なあ、オレって何も考えてないように見える？」

「は？」

ドキっとした。まさか僕の考えていることがバレたのか？いや、そんなそぶりは見せてきていないはずだ。

「誰かに...言われたのか？」

「いや...何か...うん。まあ、そんなトコ。」

僕と同じような思いをこいつに対して抱いている人間がいたなんて。よりもよって自分の容姿にしか興味のない連中に！（実際に言葉にしてみると、自分が想像していた以上にグロテスクな感情だ。）無関心を平常心、そう自分に言い聞かせる。

「ふーん。で、気にしてる的な。」

「...的な。」

へへ...なんて照れくさそうとも申し訳なさそうとも取れる笑い方を最後に、アツシはまた黙りこんでしまった。こいつでも悩んだりすることが、しかも人から言われたことで傷ついたり、気にすることがあるのな。驚きと同時に、安堵とちょっとした優越感が僕の中を駆け巡る。人生の先輩を気取り、それとなく諭すように言う。

「言わせときゃいいんだよ、そなん。不幸そうな顔で悩み事ばかり言ってる奴の方がだりいわ！言ってやれ、そいつに。そう言ってやれ！」

何がそうさせたのか...自分でも驚くほど大きな声を出しているのに気付いたのは、全てぶちまけた後だった。いや、僕にはわかっていたはずだ。おそらく兄としての何かが働いたんだ。僕の弟に、家族に面倒くさいことを言う人間が許せないと思う正義感が火を吹いたんだ。豆鉄砲を食らったハト状態のアツシは、しばらくは何も言えずに黙っていた。降り始めたにわか雨にワイパーを、とレバーに手をかける。手が滑って最高速で動くそれを見て、アツシは思い出したように笑いだす。むっつりする僕を一通りからかった後で、その口から言葉がぼつりとこぼれた。

「...兄ちゃんってさ。メガネなのに気が強いよね。我が道を行くって感じで。」

「『メガネなのに』は余計。とにかく、その兄ちゃんをアシにしているくらいのずーずーしさがあるんだ。そのくらい気にすんな。とにかくお前はヘラヘラしてりゃあいんだよ。もう見せつけるくらいになっ！」

ガハハ、と豪快に笑うほど息は続かなくて、カヒヒと変な声が出る。本当、ツメが甘いというか...ここぞという決め所に弱いというか...。溶けきってもはやクリームと化したシェイクを、勢い任せに飲む。少しだけ冷たいそれは、久々に大演説をした僕の喉の奥に優しく流れ込んできた。アツシは噛みしめるようにつぶやく。

「兄ちゃんって、ヘタレで地味だけど...やっぱ兄ちゃんだよな。」

「何だそりゃ。」

信号が青に変わる。ゆっくりとブレーキから足を離し、進みだす。左手に持っていた食べかけのハンバーガーをどうしてやろうかと少しパニックになっていたら、それに気付いたのか隣りから、

「食っちゃえ、あと一口だ。」

とアツシが言って笑った。その声に従って全部突っ込むと、一口と言うには大きすぎたか、僕の口はいっぱいになって咀嚼するのも一苦労だった。アツシは僕が一生懸命もぐもぐしているのを見て腹を抱えて笑いだした。器用にも僕の手から自然に包みを取り、片付けながらヒーヒー言っている。こいつはこうやって気を利かせて、色々切りぬけてきたのかな…。そんなことを考えながらぼんやりと運転していたら、いつの間にか十字路にさしかかっていたようで、家とは反対の方向へ曲がってしまった。

「あ、しまった！」

苦虫を噛み潰したように顔をしかめる僕に向かい、アツシは言う。

「さ、ドライブして帰りやしょう。ラクダ隊長。急ぐ旅でもあるまいし！」

天然か計算かは僕にはわからないけれど、こいつのこういうところに救われてきたのは事実だ。どんなにシャレこんでもデカくなっても（正直に言おう、アツシの方が僕より背が高い。5センチほど。たった5センチだが！）、要領の悪い僕をからかいながらもフォローしてくれる。他人だったら絶対に接点のないはずの二人なのに、こうして兄弟として生まれてきて、しかも人として情けないランクが上の僕がおにいたまだなんて、おかしい話だ。神様は、一体何が目的でこんな面白おかしい細工を施したのだろう。でも、もし僕が兄としてこいつにあげられるものがあるというのなら…それを、「神様の意図」を死ぬまでには見つけたいと思う。いや、車での送り迎えはノーカウントで。ぜひともノーカウントで。

「おうよ。」

何だか無性に兄貴風を吹かせたくなった僕は、本屋へ向かい、アツシの欲しがってたマンガの最新刊を買ってやった。やる事がことごとく小さい自分に呆れながらも、見上げた空は高く清々しくて、気持ちのいいものだった。

友だちの送迎

—あ。来た来た。おーい。

駅の通りぬけに派手な帽子をかぶった男とその連れが一人。僕が読唇術を心得ているわけではないが、近づいてくるパシリを目にしてアツシがそう言っているだろうな、というのが手に取るようにわかった。今日のパシリスト（パシリとして働く任務の内容で、僕は勝手にそう呼んでいる）は駅から弟様のお友だちをお家まで一緒にお見送りすることだ。普段は気にしている八重歯を嬉しそうにちらつかせながら、勝手にトランクを開け、荷物を詰め込む。少し日焼けした顔は、まだ海外旅行のノリが抜けておらず、すれ違う不景気な顔のサラリーマンとすれ違うたびになぜかこっちがヒヤヒヤした。

「うえーい！オレ、卒業旅行から帰ったぞー。」

「はいはい、お帰り。と、こんばんは。」

一家の大黒柱のお帰りだぞー！並みに偉そうに車へと乗りこんでくるアツシ。その後には、この一週間ですっかり疲れ果てたお友だちが続いた。食事が合わなかったのか？それともアツシに生气でも吸われたか？...間違いなく後者だな。そう確信した僕はそんな不幸人間の顔を拝んでやろうと後ろを向いた。そこにはアツシとは同じ系列にいるに違いないが、明らかに線の細い男の子が申し訳なさそうに座っていた。僕の視線に気づくと、今度はその様子を悟られまいとこなれた調子であいさつする。

「こんばんはー。今日はよろしくお願ひしまーす。」

「はいはい。近くに來たらナビしてね。」

何だかアツシのいる世界では、いつもこんな調子でいなければならないようだ。こりゃあ面倒くさい。内心うへえと思ひながら、僕はゆっくりと車を出した。

家に着くと、お友だちは僕に何度も頭を下げて「ありがとうございました」と「おやすみなさい」を繰り返しながら、中へと入って行った。やれやれ、素が丸見えだ。でも、別に嫌な感じはしなかった。むしろあれくらい腰が低いはにかみ屋さんの方が大人ウケはいいと思うのだが。まあ、いいか。ひと足早く家に帰還した彼の後ろ姿をぼんやりと目で追ひながら、僕とアツシは全く別の話をしていた。

「なあ、兄ちゃん。コーヒー買ってやるよ。缶だけど。」

「缶かよ！」

「いいじゃん。旅行代のせいで貧乏なんだよ。車そこに停めて。自販機あるから。」

「おお。」

ケータイのボタンをたたく音が耳に入る。後ろでメールでも打っているのだろう。ほの暗く青白い光に包まれたアツシの顔がバックミラー越しに見える。僕はこの時のアツシの顔が少し苦手だ。瞬きを忘れた目は何だかうつろで、ぽっかりと口を開けて...僕たち家族の知らない、別の顔。一通り返信を送ったのか、手に持ったアイテムはいつの間にかケータイから缶へとかわっていた。

「オレ、あいつ嫌いなんだよね。」

缶コーヒーのタブに苦戦しながらアツシはつぶやく。

「は？何言ってるの。」

「えー。あ、開いた。ハイ、兄ちゃんの。」

「おお。ありがと。そこのキーパーにさしといて。」

「了解。」

カコン、とプラスチックにスチール缶のぶつかる音。アツシはケータイを開き、フゥとため息をついた。

「何かさ、全部オレに決めさせるの。そのクセ決まったことには文句言うしさ。この味は無理とか、クオリティーの割に金取る店だとか。旅行中、イライラしっぱなしだったよ。」

ここで一つの疑問が浮かんだ。それは自分でも驚くほど素直に口をついて出る。

「何でそんなヤツと卒業旅行なんか行った？」

「え？」

「何で嫌いなヤツと会う必要があるんだ？」

「はあ？兄ちゃんは嫌いな人間とは付き合わないの？」

何を言っているのか全く理解できなかった。

「てか、嫌いな奴と海外旅行って！そいつに金と時間つぎ込んだのかよ。お前どんだけMだよ。」

信号が赤になった。速度をゆっくり落として止まる。アツシは黙ったままだ。カーステレオから流れる音楽が耳に障る。高校に入ってから好きになったと勧められて一方的に僕の車に置いておかれているもので、彼がこの空間にいる間はいつも聞かされる。そしてどれが好きとか、どの歌詞が泣けるとか色々言われるのだが、僕にはまだこのバンドのよさが今一つわからない。いつだったか、正直全部同じに聞こえると告白した時は「やっぱ恋愛経験が乏しいオタにはわからんか、このよさが」的なことを言われてムツとしたので、もうただのBGMとして流すことにしている。

聞こえるか聞こえないかくらいの低くて小さい声が出た。

「そんなんできたら...兄ちゃんみたいにできたら苦労しないよ。」

「え？」

「いや、何でもない。寝ていい？家に着くまで。」

「おお。」

車は夜の道をすべるように走る。途中、鼻をすする音が聞こえたので、BGMのボリュームを少し上げ、静かに窓を閉め、エアコンをつけた。そのズズツというのはなかなか止まなかったが、しばらくすると隣りからはこちらにまで心地よさが伝わってくるような寝息に変わった。

家に着くと、

「今日はゴメンな。迎えに来てもらって。コレ、土産。兄ちゃんだけは迎えに来てくれるってわかってたから特別な。みんなには秘密な？」

「おお。何か悪いな、逆に気い遣わせたみたいでー」

可愛いところもあるじゃあないか。そう思いながら手渡された紙袋を開けると、そこからはボールペンが一本転がり出てきた。そのフローティングボールペンは、傾けるとボンテージ姿のブ

ロンドねえちゃんが裸になる細工のやつだった。急いでそれを袋にしまい、横をにらみつける。さっきまでそこにいたはずのアツシは、荷物を持って玄関まで走っている途中だった。振り返ると、いたずらっぽく笑って言った。

「オクテだからタマってんじゃないかと思って。オレ、超兄孝行！」

「おま！バカにしてんのか！」

「ははっ。冗談だって。もー、おカタいなあお兄ちゃんは。早く入ろうぜ、飛行機の中超暑くてさ、チョコが溶けてるかもしれないんだ。」

家に入ると、アツシはリビングでテレビを見ていた父さんと母さんにあいさつをしていった部屋へ戻り、両手いっぱいのお土産を持って下りてきた。心配していたチョコレートは溶けておらず、安心したと何度も言っては飛行機で見た面白いおっさんのこととか、現地で出会ったタクシーの運転手の覚えていた下世話な日本語のこととかをデジカメで撮った写真を見せながら話している。嫌いな奴との旅行だったとはいえ、よほど嬉しかったのだろう。その表情はいきいきとしている。その様子を眺めながらチョコを食べる。

やっぱりいつまでも僕の知っているアツシでいてほしい。いつまでもお調子者で、大好きな友だちにだけ囲まれてリーダーを気取るちょっとウザい人気者。誘われたのを断れずに、嫌いな奴と無理して旅行に行くような、そんなことをしてまで続けなければならない人間関係に一生懸命しがみついて欲しくない。大人になるにつれて、これからもっと苦しくなる環境が待っているというのに、そんなに早く苦しむ必要があるのだろうか。できれば今だけでも楽しくいてほしい。そう思うのは僕のワガママだろうか。

次の日に、母さんに買い物を頼まれて車に乗った。昨日の夜のままになっていたカーステレオからはあの賑やかなバンドの歌が流れる。いつもなら不快になってCDを替えたり電源を切ったりするのを、今日は何を思ったか放置してじっくり聞いてみることにした。タイミング良くアツシイチオシの曲が始まる。やっぱり同じようにしか聞こえない。何だか悔しいのでリピートボタンを押し、数年前に練習した英語のリスニングテストの要領で何度も聞き返した。そして何度目かで急に聞き取れるようになってハッとした。その曲は、生きることに疲れて傷ついた人間に向けられた、全部包み込んであげるよ、と言う癒し系応援ソングだったからだ。

今日もまたパシリだ。お使いの帰りに掛ってきた電話を運悪く取ってしまったので、にわか雨に打たれたアツシを駅で拾うハメになった。通り抜けに入ると、屋根のある出口から一人のオシャレ少年がこちらへと駆けてくる。いつも僕をバカにして笑っているアツシの顔からは雨が滴り、今日は何だかいつもより小さく、泣いているように見えた。

DVDを借りに

深夜にテレビをつけると、見覚えのある女の子キャラが水着ではしゃいでいた。この茶髪に尋常じゃない胸の大きさ...間違いない。アツシのお気に入りちゃんだ！僕はアツシの部屋まで駆けて行って、声を掛けようとした。でも、部屋の前まで来て、何を言ってどうするのか冷静に考えてみると...何も出てこないことに気づき、何だか笑えてやめた。考えてみれば懐かしいものだ。もう半年も前のことだったのか。

世間では「お兄ちゃん」と言い兄を慕う女の子に注目が集まっているが、残念ながら生物学上でXの隣りにYを勝ち取ってしまったのが僕の弟だ（まあ僕もそうなんだが）。もし妹だったら。アツコと仮定しよう。僕よりも背の高い妹が、家に僕の姿を見つけるたびに「そこまで送って」とせがみ、ケータイでつかまろうものなら「迎えに来て」とあの忌々しい呪いの言葉を述べる。容姿？今のアツシとつき合っている女の友人の格好を思い浮かべれば十分だ。でっかくてオシャレ街道まっしぐらな妹。ミニスカ？ニーソ？いや、ちっとも萌えないね。こうした類のときめきは、ないものねだりの幻想に過ぎない。僕は店長オススメの妹に萌えるアニメDVDをそっと棚の目立たないところへしまい、ハーレム系の学園ものをそのかわりに並べた。そんな僕がいるのはビデオ屋。もちろんアツシにアシにされた。

「兄ちゃん、オレ眠れない。DVD借りに行こう。」

運動会での興奮状態が収まらないのと、一日中陽にあたっていたせいで体がじんわりと熱を帯びているせいでベッドに入っても目がらんらんとして一睡もできないと主張するアツシ。真夜中に兄貴の部屋のドアをたたくに至った理由を述べながら、パーカーのフードについたヒモをいじっている。なるほど、「ちょっとそこまで出かける」支度はばっちりというわけだ。明日が（厳密に言うと今日なのだが）代休だからと調子に乗っている。いい気なもんだ。

「何、兄ちゃんそんなん見るの？」

「は？」

「オレは...その茶色の髪の子だな。そう、その巨乳の。兄ちゃんは？」

「は、え？」

「うーん。兄ちゃんはなあ、当ててやるよ。えーと...この子！このメガネのいかにもおねーたま系の。」

「いや（いや確かにドンピシャだけど！）、おま...（お前、人が見てて恥ずかしくないのかよ）！」

同じコーナーに一組のカップルがやってきて、僕たちの姿を見てクスクス笑っている。アツシにとってはそんなの気にもならないだろうが、注目されることに慣れていない僕は顔から火が出そうだった。そこで、我が弟様がかしこらしく何か言っているのそっちのけでアニメコーナーから退散することにした。

「やっぱ長男は甘えたい気持ちが強いのかな〜。今度それでレポート書くといいよ...って、ちょっと！どこ行くの、兄ちゃん。」

いずれにしても、僕は場違いなところへ来る運命にあるらしい。次に迷い込んだのはラブストーリーコーナーの樹海だ。後から追いかけてきたアツシがぼやく。

「ちょっとー、可愛い弟置いて逃げるってどういうことー？深夜のビデオ屋に未成年放置はマズいよー。」

「うるさい。さっきまで一人でウロウロしてたじゃん。それにー」

「おあー！」

「な、何だよ？」

いちいち声の大きい弟だ。小さい頃に美術館や図書館で恥をかいてきたのを思い出す。今では体までデカくなって、兄としての威厳がまるで保てなくなってしまった。はたから見ると、僕たちは兄弟じゃあなくて...親分と子分。もちろん僕が...うん、これ以上は悲しくなるのでやめよう。

「これさあ！前に言ってたんだよ、ケイ君が。すっげえ泣けるって。」

「どれ？」

「これえ！何かめっちゃヤバいらしい。知ってる？」

「え、これ？」

映画好きを自負する僕は、何だかんだ言いながらあらゆるジャンルの映画を観まくっている。ちょっと借りるのが恥ずかしいこのラブストーリーの棚も、実は女子たちがいないであろう時間を狙っては足を運んでいるのだ。そんな僕から言わせてもらおうと、アツシの手にしているDVDは...

「これ、僕観たけど...ただの恋愛モンじゃあないぞ。」

「え、何で？」

この作品は、もっと深いところがある。少なくとも僕はそう解釈している。

「人間の嫌なところがモロに出てるエグいやつだって。」

「何言ってるの？純愛って書いてあるじゃん。きっと甘々だね！何なら帰ってから検証会してみる？」

「おお、望むところだね！」

どうやら僕はこれから家に帰って、自分の弟と並んで恋愛モノのDVDを観ることになってしまった。何やら変てこな展開になってしまったけれど、まあアツシさまさまのたつてのお望みだ。兄として叶えてやらなければならないだろう。

「じゃあオレ、これとこれ、借りてくるわ。兄ちゃんはそのCDだけ？」

「おお。」

「じゃあ一緒に借りてきてやるよ。やっさしー、オレ。」

レジに並んでいるアツシが僕に手招きする。自販機でジュースを買っておいてという指示だった。手のセンサーで開く、僕の苦手なタイプの自動ドアを何とか出ると、外はシンとしていた。この不夜城を除いて、街はもう眠っている。不快なくらいこうこうと光を放つ店内の照明。駐車場の街灯にたかるでっかい蛾や、名前を知らないひよろ長の虫たち。その明るい光に吸い寄せられ、必死に羽を動かしている様は、夜に何か刺激を求めて街を徘徊する若者さながらだ。僕とアツシは車に戻り、それぞれのジュースを飲んだ。ふと、虫ってどうやって水を飲むのかななんて聞いたら、アツシは僕をファール兄さんとからかって笑う。その顔は短い期間にいきなり陽に焼けたせいで、酔っ払いみたいに赤くなっていた。

「今夜は寝かさねえよ、ファール兄・さ・んっ。」

「キモ！何だそりゃ。」

家に帰り、DVDプレイヤーのある僕の部屋にこっそり入る。エアコンとテレビのスイッチを入れ、観賞会ならぬ、検証会が始まる。昼間に照らされたアスファルトからじんわりとあがってくる熱と、秋の始まりにはふさわしくない湿気。部屋にどんよりとたちこめるそれを払しょくするようにエアコンから涼しい風が流れ出る。心地よい冷気を感じながらアツシを見ると、さっき僕が持ってきたコーラを嬉しそうに飲みながらすっかり見入っている。何が悲しくて弟とラブストーリーを見ているのだろうか？若干の気まずさは、ある。ちょっとエロいシーンがあるからな...なんて思いながら、僕はコーラを一口飲み、映画に集中することに決めた。

もう一度アツシの部屋の前に立つ。よく見ると、まだ電気はついているようだ。ドアの隙間からもれる光を足元に確認した僕は、静かにノックした。思った以上に廊下に響く木と骨のぶつかる音は、引越前までナーバスになっている弟の心臓をさぞ刺激するものだろう。来週にはこの部屋から出て行き、新しい土地で新しい友だちと新しいことを勉強する。物理から解放されることをひどく喜んでいる一方で、胸中にはきっと計り知れない不安も共存しているに違いない。できるだけ今は...出発までの時間は、兄らしいことはできなくても、アツシを笑わせてやりたい。

引越しが終わって、手伝ってくれた家族のみんなが車に乗り込み、帰って行くのを見送る。自分はその車内に乗り込まずにただ見送る。家族の一員でありながら、その瞬間は家族でなくなる自分。今まで望んでいた「自立」や「ひとりぼっち」が、ただの「孤独」に変わる瞬間だ。その時が来ても、4月初旬の強い風のような冷たい寂しさを心の隙間に入れさせないために僕は...

足音が近づいてくる。それが板一枚挟んで自分と向かい合わせになって、ドアを開けるのを待つ。言いたいことはもう決まっている。

「あ、兄ちゃん。ちょ、もう夜中ですけどー？」

「何か今日、眠れなくね？ドライブ、行かないか？上着、取ってこい。」